

遺稿集

PART1「虫の意気」



藤井 醇

遺稿集

Part1 「虫の意気」



コナカハグロトンボ (八重山)

藤井 醇 プロフィール

1933年東京生まれ。生まれつきの虫好き。疎開で10歳から23歳まで自然豊かな信州で育ち、虫好きは更に高じ、親の心配、反対をよそに、その道を探る。上京、「豊島園昆虫館」に仕事をし、8年間「昆虫に仕える」その間に必要に迫られ、昆虫の写真を撮るようになり、徐々に写真へと、スライド。新聞に掲載された一点の作品がさる出版社社長の眼にとまり、バックアップを受け、それを機に写真家として独立。

以来40有余年、昆虫の生態写真を撮り続けている。

1996年、再び信州へ。信州で若き友人を得、薦めでデジカメに切り替えパソコンを教わり、使いこなせるようになり、長年撮り貯めた作品をデジタル化、保存など、人生の終局に向けて整理しつつ、冬季はパソコンで、昆虫、花、鳥などの絵を描いて楽しみ、「パソコン絵師」と自称している。

著書

「昆虫」 講談社ブルーバックスシリーズ
「ちょうちょ」「こうちゅう」「せみ・ばった・とんぼ」フレーベル館
「昆虫の観察と飼育」「昆虫と遊ぼう」他 黎明書房
「ふゆの虫」 福音館（科学絵本）
「みんなのせかい」 NHK出版
「ありとちょう」 鈴木出版 他多数

ごあいさつ

遺稿集は文字通り遺された原稿などを後に残された人が編むが、何でも全て自分でやりたい癖があり、造ることにした。生前葬と同じ洒落である。

「虫の意気」と題したのは「遺稿集」と言えども、氣息奄々の「虫の息」ではあまりにもそのまま過ぎて面白くないので「虫の意気」にした。

虫のごとく、踏み潰されても、農薬の洗礼を受けてもしぶとく80歳に手が届くまで生きてきたという意味である。

今後も「虫の意気」でもう少し楽しませてもらおうと欲張っているが、頸動脈が85%塞がっていて何時脳梗塞になっても不思議でない状態だと医者に言われている。真綿で首を締められているようで落ち着かないが悲観はしていない。生来楽天的である。

最近、出版社ではなく印刷屋さんから写真集をと薦められた。

例え出版社であっても近頃は殆ど自費出版に近い条件のお勧めであるからその気にはなれない。過去十冊くらい出してきているがそれが生業であったから今更自費で出版などと言うことは考えにくい。

しかし、信州へ移り住んでから既に15年をすぎた。八重山へも毎年のように通った。その間けっこう撮り貯めた作品がある。

ここ数年作品展は数回催したが、本にはしていない。考えた末、全て手造りでということにした次第である。

飽くまで写真が主体であるが、多少の説明が必要な作品もあるので、文を添えた。説明が必要でない作品は、その虫と著者との関わりであったり思い出であったり、雑多である。とぼして作品だけご覧頂いても結構

「虫の意気」で生きてきた。「虫の域」には遠く及ばないが、許されれば

「虫の域」「虫の粹」「虫の息」まで造りたいと想っているが、さて？

尚2012年10月脳梗塞に襲われたが比較的軽く12月に復帰した。

2010年10月 藤井 醇

クロアナバチ

少年時代ファーブルの昆虫記でラングドッグアナバチという狩をする蜂の存在を知り南フランスに憧れた。中学生の時（現千曲市）庭先でクモを狩る狩蜂を見つけ、身近にも狩蜂の仲間がいることを知り喜んだ。

10 数年後、昆虫館に勤めるようになって、ジガバチその他数種見る機会に恵まれ、クロアナバチにも出会った。その感動は忘れられない。しかし、その後、八重山でちらっと見かけたがシャッターチャンスがなかった。

凡そ **50** 年前の貴重な一点である。



獲物を運ぶクロアナバチ

ツマベニチョウ

ツマベニチョウと初めて出会ったのは 1965 年頃と記憶している。奄美大島の集落の生垣のハイビスカスに盛んに飛来して来るが、敏感で直ぐ逃げてしまいあまり好いショットは得られなかった。右の作品は、沖縄の今帰仁へ行く途中のタクシーを停めてもらい撮ったものである。近づけば、さっさと逃げてしまいこの時も数枚でチャンスも逃げてしまった。

モンシロチョウに代表される、シロチョウ科最大でアゲハチョウを超える。翅の先の濃いオレンジが美しい。花の名前は未だ調べがっていない。

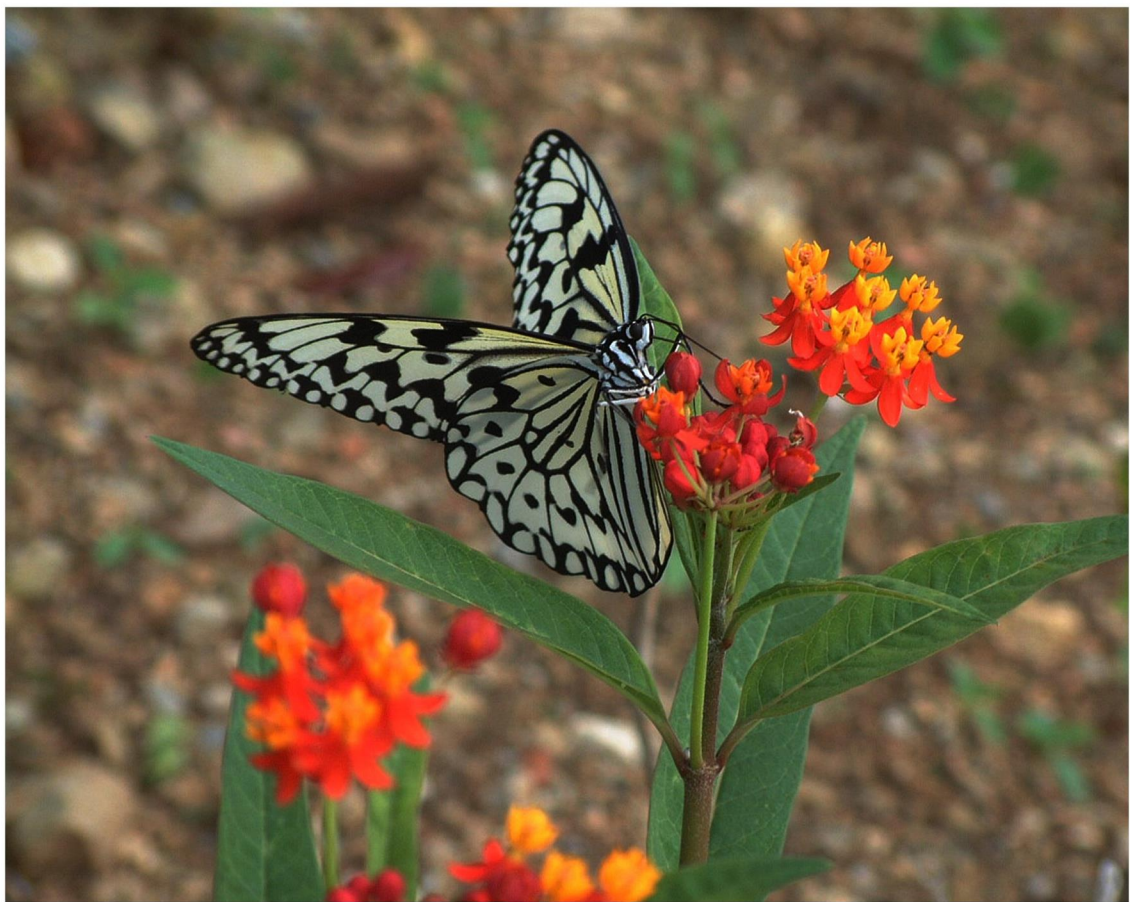


ツマベニチョウ

オオゴマダラ

本土復帰前 1969 年 12 月、初めて西表に渡った。「イリオモテヤマネコ調査団」の随員カメラマンとしてであった。

その時初めてオオゴマダラの飛翔を見た。白地に黒斑のシンプルな柄の蝶だが最大級の種で、花にとまっても、大空を滑空する姿を見ても感動の一語である。その折は崖の芙蓉の花から離れず、近づくことも、好いカメラポジションもとれず、得心のできる作品は得られなかった。ここ十年ほど八重山通いをして、ようやく満足の得られる作品が得られた。トウワタの花蜜を吸っている。艶やかな花の色とのコントラストが見事である。



トウワタの蜜を吸うオオゴマダラ

宝石

デパートのガラスケースの中の宝石とは全く縁のない貧乏暮らしであるが、昆虫の世界はまるで宝石箱そのもので、そんな世界にどっぷり浸かっているだけで充分である。

百万種を超える種があり、多くは卵、幼虫、蛹、成虫と姿を変える。そして、それぞれの形、色彩、デザインすべてにおいて、人間の考など遠く及ばない。

上段左、ナナホシキンカメ 上段右オオゴマダラの蛹

下段左、ジュウシホシクビナガハムシ 下段右、ハンミョウ



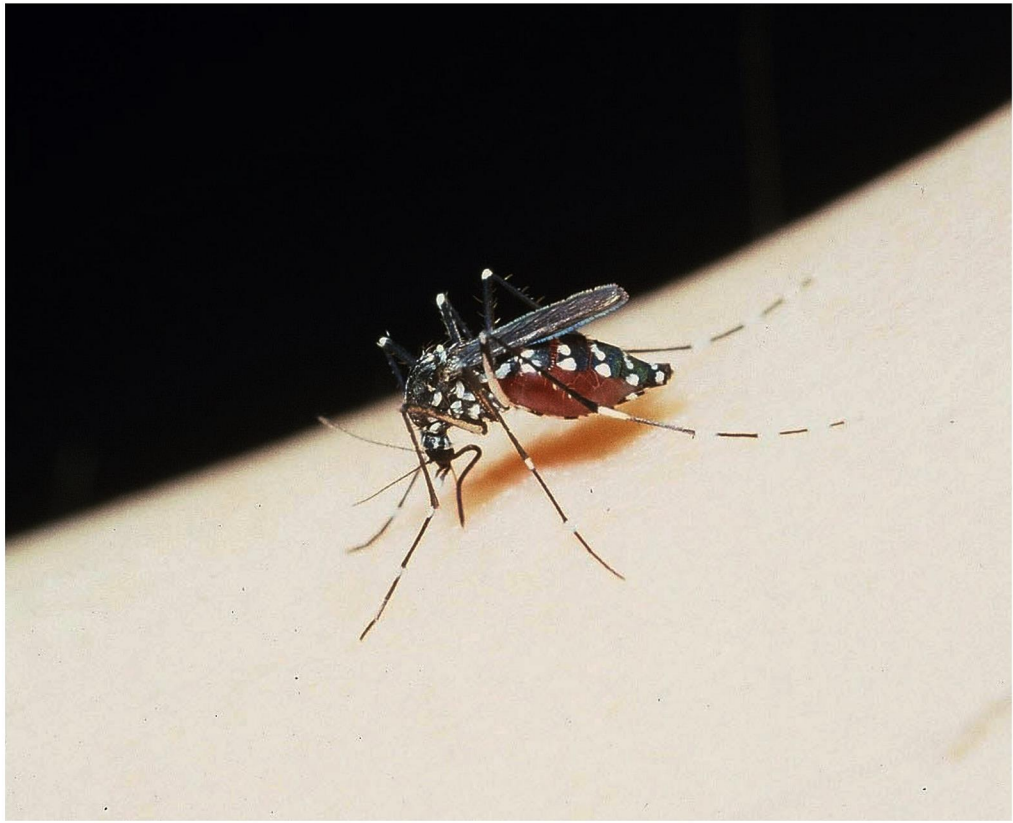
寶石



シマカ

多くの作品は美しい場面であるが、何でも撮ってきたので、中にはこのような作品もあると書いた。しかし、よく見ればこれも美しい。

縁先で家人の脛にシマカがとまったのを見つけ「暫く動くな」と命じ、シマカが鱈腹吸血するまで痒いのを我慢させてからのショット。とにかく被写体が4ミリほど、三脚など準備もなし、手持ちでピンとあわせも大変、呼吸を止めての、疲れる撮影であった。しかし、いきなり「動くな」といわれ、痒いのを我慢してくれた家人に感謝すべきであろう。



ヒトスジシマカ

鼻の頭のアサギマダラ

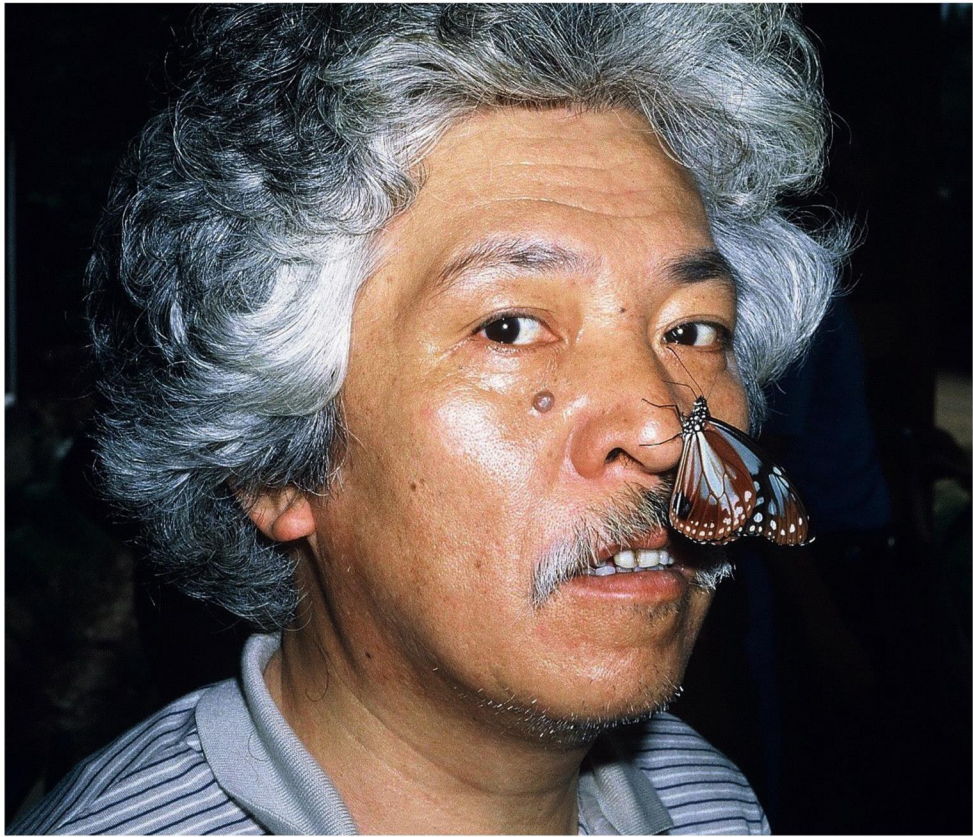
己の髪に未だ黒髪が残っていた時代があったことを思い出させる写真であるが、この顔を晒したくて載せたわけではない。

凡そ 30 年前と推察しているが定宿にしている山小屋で夏の終りのある日突然小屋の中へアサギマダラが逃げるように数匹飛び込んできて、一匹が鼻の頭に止まった。あっけにとられて寄り目で見ていると手の甲に激痛、見ればルリボシヤンマが甲に産卵管を突き立てている、思わず振り払ってしまったが、今思えばそれも撮っておくべきだった。

アサギマダラの写真は近くにいた小屋の主人にカメラを渡して撮ってもらった。

ちょっと異常なひと時の体験であった。

鈍くなった現代人には感じられない気象的な異常があったのではないかと推測はしているが未だに謎の時間として記憶している。



鼻の頭のアサギマダラ



腹部の節の紋をモノサシの目盛りにみたてて

産卵中のキイトトンボ（右頁）

子どもの頃、小さなイトトンボの類を「トースミトンボ」と呼んでいた。モノサシトンボとも呼んでいた。モノサシは判るが「トースミ」は意味を知らずにいたが、ある時調べて納得。

「灯芯トンボ」トンボであった。「トーシントンボ」転じて「トースミトンボ」。

蛇足になるが「灯芯」も既に死語になっていて若い方には判らぬかもしれない。

イトトンボの細い腹を油を灯す「灯芯」に見立てて一般に使われていた呼び名ということである。

右頁やや直立しているのはオス。メスは水草に腹を曲げて産卵



キイトンボ産卵

ショウジョウトンボ

初夏から池や田んぼの周辺に姿を見せる。鮮やかな深紅は他のアカネ類の色彩とは明確に異なる。

トンボの前にホバリングしているコバチはシャッターを押した直後にトンボの餌食になった。

因みに、ショウジョウは漢字で「猩猩」中国に伝わる想像上の獣で真っ赤な顔の猿のようなもの。オランウータンを指しているのではないかといわれている。



ショウジョウトンボ

オオヨコバイ

オオヨコバイと名付けられているが体長 7 ミリほどの大きさですから、仲間がいかにか小さいかということがお分かりであろう。大粋ではセミなどと同じ類で木や草の汁を吸って生きている。小さいが美しいものが多い。ヨコバイは文字通り横に這う（歩く）からで、人が近づくと茎の裏側へ横歩きで隠れるしぐさはかわいらしい。



オオヨコバイ



藤井 醇

〒381-2227 長野市川中島町今井原7-2-1-317
Tel (026)-284-8993 E-Mail zephyrus@avis.ne.jp

ナナホシテントウ

三十代に入って間もなく昆虫館を退きフリーになった。写真家として独立したと言えはかっこいいが駆け出しであるから、名刺の肩書きに困った。「写真家」はおこがましいし、昆虫研究家でもない。そこで横書きの名前の上にナナホシテントウのイラストを入れ、渡す相手が女性に限って、その場で彩色してお渡しした。名刺は相手に憶えていただくことが第一の目的であるからこの名刺は効果があった。

上の名刺は現在のものだが、相変わらずナナホシテントウのお世話になっている。実際はカラーである。



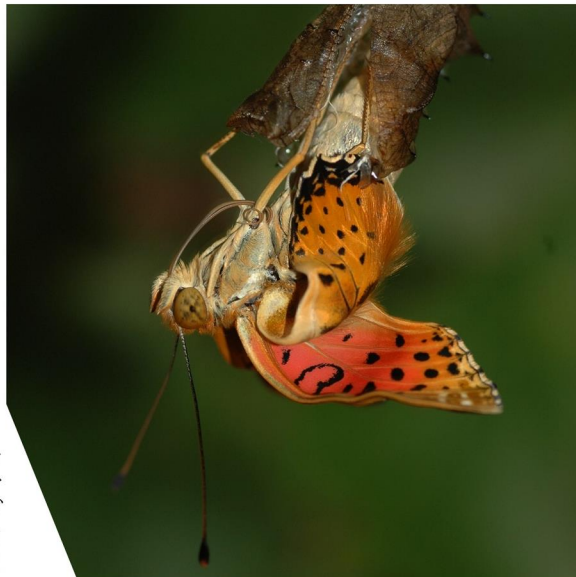
アブラムシを捕食するナナホシテントウ

ツマグロヒョウモン羽化

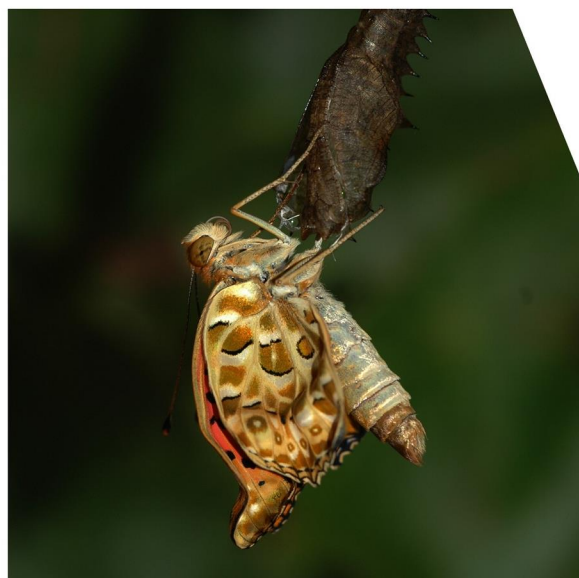
羽化の撮影のチャンスに恵まれ興奮しながら撮る。掲載した前後中間全てで30カット。

上、左・右、下、左・右の順である。蛹からの脱出は意外に早く蛹がわれて脱出までは3分弱。翅が伸きるまで2分。飛べるようになるまでは2時間ほど要する。

何度見ても感動する。撮影に失敗したときは本当にかっかりして疲れるが成功したときの喜びは大きい。



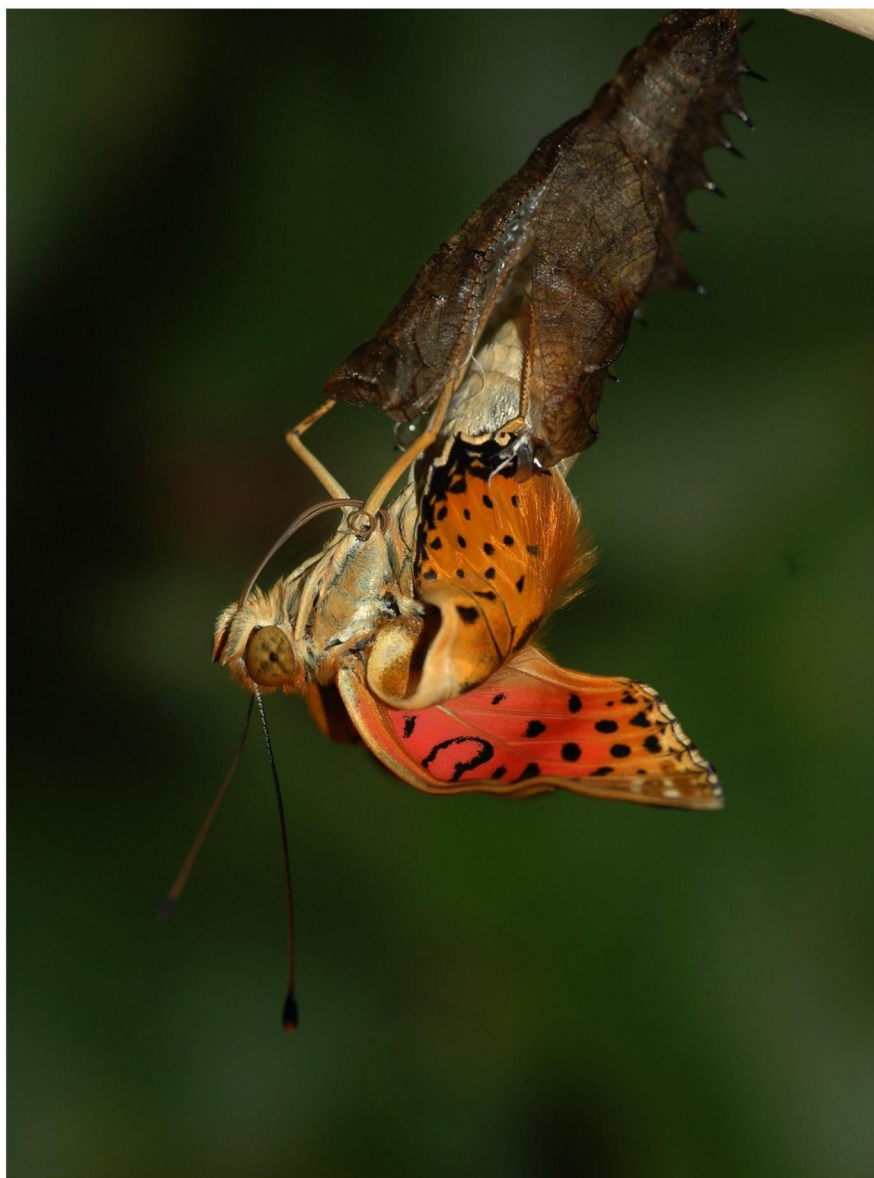
ツマグロヒョウモン羽化



決定的瞬間

前頁に羽化の組写真を紹介したが、一点で決めるならこの一点しかない。まさに決定的瞬間で一呼吸早くても遅くても駄目であろう。今までで最高の瞬間を捉えたと喜んでいる。

このツマグロヒョウモンは **50** 年前には静岡以西に分布していたやや暖地系の種で東京近辺でも見ることはなかったが、温暖化の影響か、信州でも普通に見られるようになってしまった。喜んでばかりはられない。元々生き物は生息域を広げようと徐々に広げては行くがこのスピードには驚いている。



ツマグロヒョウモン羽化

ハグロトンボ

田んぼの用水、集落の中の疎水など、小さな流れがあればどこにでも姿を見せたものがいつの間にか姿をみせなくなってしまう。

ハグロトンボもそんな一種であるが、近くの用水で昨年姿を見せた。

引っ越してきて12年を過ぎるが初めての登場で喜んでいる。

川辺にハグロトンボが戻ってきただけで豊かな気分になる。野の花が咲き、鳥が鳴き鳥が子育てをできるような環境を保ちたいものだ。



ハグロトンボ

キリギリスの幼虫

花は山すそ、道端に咲くケシ科のクサノオウ。この花が特に好きなわけではなさそうだが、花びらは柔らかくて美味いらしい。翡翠の細工物のようにみずみずしく美しい。キリギリスの孵化の作品が認められ、写真家として歩むようになったのでキリギリスには格別の想いがある。



キリギリスの幼虫

オオカマキリ

被写体としてカマキリ類の魅力はトップクラスであろう。
昆虫で表情らしきものがあるのはカマキリのみとあってよい。
それは、頭だけを自由に動かせるからで、他の殆どの昆虫達には
出来ない。真後ろを振り返ることすらできるのだから。
それは生きた獲物を捕らえるカマキリが獲得した能力であろう。
花の陰にひそみ、花を訪れる小昆虫を待ち伏せしている。



花陰で訪れる昆虫たちを待ち伏せるオオカマキリ

横領

大カマキリが小指の太さほどもあるイモムシをむさぼり食べている。
両手ははなせない。それを良いことに、クロスズメバチがちゃっかりと
イモムシの肉を横領している場面。
蜂は仲間に知らせるから次々現れる。せっかくの大きな獲物も半分は
横領されてしまった。そのクロスズメバチの幼虫を信州の人は横領する。



横領

クチブトカメムシの脱皮

カメムシ類は悪臭を放つし、作物に被害を与える種もあり一般には嫌われているが、姿形は変化に富み、色彩も美しいものが多い。

彼らは幼虫時代、群れていることが多く、脱皮を繰り返して徐々に大きくなるので、写真のような場面を目撃することは、しばしばある。

蝶の羽化のような劇的な変化ではないが、それでも脱皮のプロセスを見ていて、やはり厳粛であり、感動的でさえある。



クチブトカメムシの脱皮

ミツバチ

昔、千葉の養蜂家の採蜜を取材した。あらかじめ巣の中へ煙を送り込み蜂を鎮める。ふたをとり巢板を取り出し、ハチを刷毛で払い巢板を遠心分離機に入れ廻して蜜を絞る。

その間作業をしている人はあちこち蜂に刺されるが、痛そうな顔もしない。主人がひとこと、「うちはこうして従業員（ミツバチ）がストライキもやらずよく働いてくれるので、わしは何もせん。

蜜を絞るだけで、あとは近くの中山競馬場で遊んでいるだけだ。

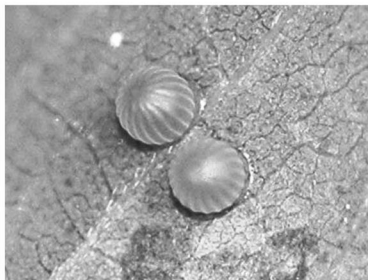
当時若かった私の顔を見て、にやにやしていた。

その顔は未だに記憶の隅にある。



ミツバチ

産み付けられた卵



ゴマダラチョウ産卵（右ページ）

本種はオオムラサキと共に幼虫がエノキの葉を食していて、雑木林の激減とともにエノキも少なくなりオオムラサキと共に一時、希少な種になってしまった。オオムラサキは手厚い保護でやや回復したが本種はどうであろうか？。元々はさして珍しい種ではなかったが今は南方系のアカホシゴマダラの方がめが目立っていると聞く。

記憶は定かでないが写真を撮り始めてまもなくだと思ふ、週刊朝日に掲載されたことがある。しかし、その後縁が薄くあまり写真を撮っていない。4~5年前、信州新町で個展を開いた折、会場のちかくで撮ったのがこの作品である。



ゴマダラチョウ産卵

オオムラサキ

中学二年の夏、千曲市の西側の里山で初めて捕虫網に収めた時の手ごたえと感動は 60 年後の今でも明確に記憶している。

中央線、葦崎の西側のクヌギ林の樹液に群がっていた頃、残念ながら未だ写真を撮っておらず残念でたまらない。写真を撮るようになってから数回通ったが環境が当時と変わってしまって往時のような「クヌギ酒場」の賑わいはなく、快心のショットは得られていない。右ページの写真は黄色いストローを伸ばして水分を補給しようと探っているが水分などはなさそうだ。

蝶の吸水は水分だけではなくミネラルの補給らしいということが最近言われている。



オオムラサキ

ギンヤンマの産卵

夏の暑い日に公園などの池へ行けばパトロールしている姿がよく見られる。翡翠のような複眼、腹の基部の鮮やかなブルーのふくらみは魅力的で子どもの頃から追いかけた。ヤンマはなかなか止まってくれないので、カメラに収めるチャンスは少ない。小さな池で産卵中のペアを収めた。撮影中盛んに他のオスがアタックしてくる。



ギンヤンマの産卵

キバネツノトンボ

広々とした平地、低山に5～6月姿を見せ、フルスピードで飛び回っている。たまには草むらで翅を休めるが、なかなか活発で、カゲロウやクサカゲロウの近縁とは思えない。いがぐり頭、つぶらな黒い瞳の、やんちゃ坊主を連想する。

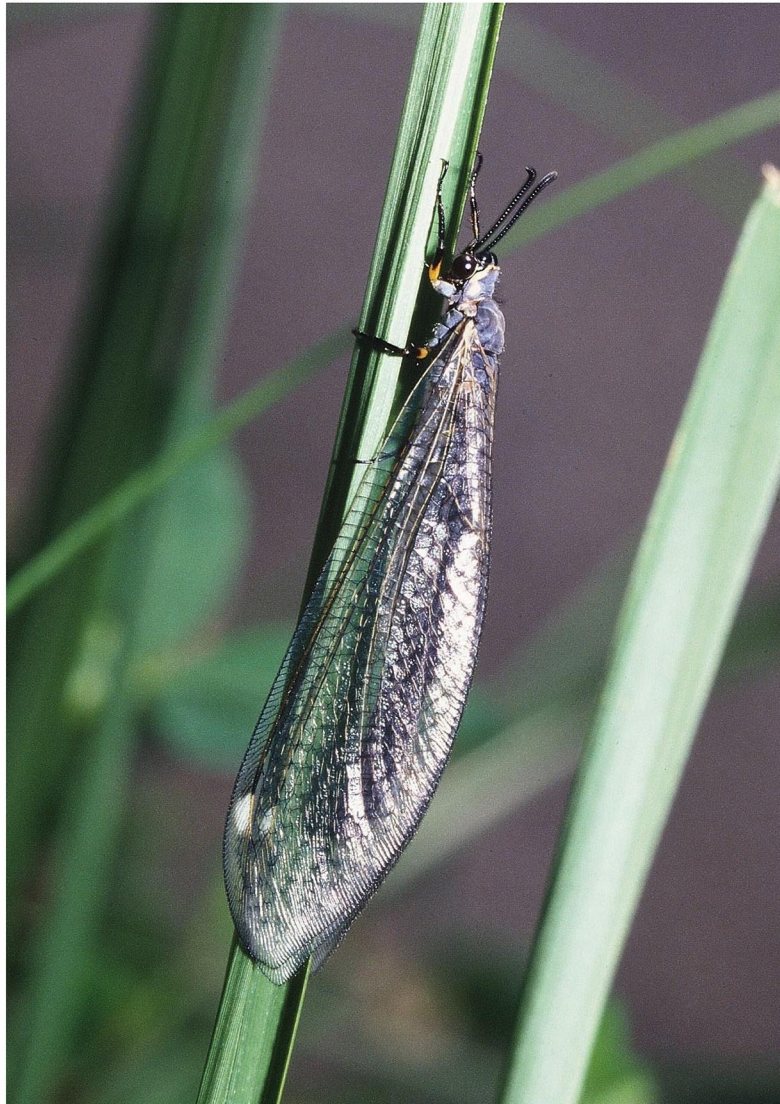


交尾中のキバネツノトンボ



ウスバカゲロウ

「ウスバ・カゲロウ」であって「ウスバカ・ゲロウ」ではない。
成虫の名前はよく知られているが、姿は見たことがない人が多い。
カゲロウより幼虫であるアリジゴクの方が子どもの頃に馴染んでいる。
寺社の縁の下にあるすり鉢型の罫(写真上)の底より深くシャベルで
掘って、幼虫を探したこと、男の子なら殆ど経験しているはず。
前頁のキバネツノトンボとは親戚筋にあたる。



ウスバカゲロウ



オオルリシジミ（絶滅危惧種）

発行 アトリエ・フジイ

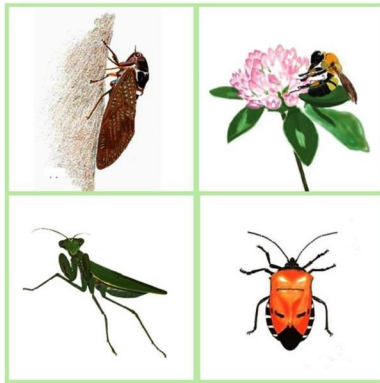
住所 長野市川中島町

発行日 2010年12月3日

企画・構成・編集・写真・文・印刷・製本 藤井 醇

エディション NO /200

アトリエ・フジイ



パソコン画 A.fujii